

平成 29 年度日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞「実践ケア賞」

じゅんちゃん一座

【設立年月日】2011 年 12 月 1 日

【授賞理由】

認知症の人や家族そして地域社会が抱える課題について方言やユーモアを交えた「認知症寸劇」という特徴的な手法を用い啓発活動を継続されてきました。これは認知症に関する正しい知識や対応方法を分かりやすく伝えることで、地域社会における介護の共有化を促進する新たな試みであり高く評価することができます。

【団体概要】

じゅんちゃん一座（以下、一座）は、寸劇を用いて認知症の普及啓発を行うことを目的に、十和田市立中央病院（以下、当院）の精神科医師の竹内淳子（以下、座長）が、地域の保健師、介護支援専門員らに声をかけ、2011 年に立ち上げたボランティア団体である。公演はエデュテインメントの手法を用い、精神科医師である座長による講義と一座による寸劇を交互に組み合わせ、聴いて見て笑っているうちに認知症についての知識や対応を自然と身につけられるようにしている。現在、公演は 110 回を超えた。認知症は全世代が知っておく必要があるものと考え、小・中・高等学校や職場のメンタルヘルス研修等での公演も行っている。

【事業活動】

認知症の普及啓発を目的に、精神科医師による講義と寸劇を組み合わせた公演を行っている。エデュテインメントの手法が好評で、高齢者を中心とした市民から公演依頼が多く 85 回実施。医師会を含めた医療介護従事者研修 10 回実施。公演を行うだけでなく、2014 年には介護うつ等の問題を抱える働き盛りの世代、これから社会を担う子どもたちへの啓発が必要であると青森県知事へ提言した。活動拠点である十和田市では、市役所・警察署・消防署や小・中・高等学校に働きかけた結果、公演実現に至り、現在 16 回実施している。共に生きる社会を目指し、活動は伝えるから、広げる、繋がる、繋げるに発展している。

【業績等】

当院の精神科新患者における認知症割合は、一座活動前の 27%から 47%に増加。これは一座の公演を見ることで早期の段階で認知症に気づき受診する人や、病院受診の敷居が下がり、軽いもの忘れの段階で自ら受診する人が増加したからである。レビー小体型認知症（以下、DLB）の寸劇を見て、早期に DLB を疑って受診するケースも増えている。一般に認知症の 20%を占めるといわれる DLB が、当院においては 31%にも及ぶ。入院患者数に占める認知症の割合は、10%から 5%に低下。これは、認知症者の在宅生活を支える人づくり・関係づく

り・地域づくりがなされたからと言える。公演は、笑っているうちに認知症について学べると好評で、再公演依頼率も 31%と高い。さらに、公演活動は認知症になっても「共に生きる」ことができる地域のために連携を要する人たちとの「顔の見える関係づくり」の役割も果たしている。今後も認知症になっても「共に生きる」ことができる地域づくり・人づくりを行うため、全世代に向けて公演を行っていく。また「共に生きる」地域づくりのために、理解と連携が必要不可欠な教育現場・職域・商業施設・金融機関等、地域の重要な社会資源へも働きかけを続け、さらなる公演実施へと向けて活動していく。